



OVERSEAS

Republic of Singapore

— シンガポール共和国 —

海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

海外事情



シンガポールに魅せられて



山城 善郎 YAMASHIRO Yoshiro
基礎地盤コンサルタンツ株式会社
シンガポール支社

常夏の国

最近「シンガポールに関する特集を日本で放送していた」とよく耳にする。2019年で在星（在シンガポール）5年目に突入し、ほんの少しだけ長く滞在している者としてシンガポールについて紹介してみたい。

シンガポールは日本の南西約5,200kmに位置し、国土面積は現在719.2km²で東京23区より少し大きい島国である。「現在」としたのは埋立が進行中のため、少しずつではあるが確実にその面積を増やしているからである。

北半球に属しているが、ほぼ赤道直下のため明確な季節の区切りはなく、年間を通して気温は25～32℃で日本の夏よりやや涼しいくらいの気候である。写真1は5月に撮影したものであるが、この景色は年間を通じて殆ど変わることがない。北海道にいた頃は、日照時間の変化で四季の移ろいを感じたものだったが、シンガポールでは日の出や日の入の時間も年間を通して大きく変わることはない。朝7時に明るくなり、夜7時半に暗くなる。

3～10月は乾季とされているが、

その間もスコールに見舞われるため、常に折り畳み傘を持ち歩くのが良いだろう。11～2月は雨季とされており、毎日1度は雨が降り、じめじめとした日が続く。

野外での作業が主となる我々地盤調査業者としては雨が降らない方が作業が捗り歓迎だが、一般の人にとっては雨が降る雨季の方が気温が下がるため、若干過ごし易いことだろう。ただ、オフィスやショッピングモールでは強烈にエアコンが効

いているので、出かける際にはカーディガンなどの羽織り物を持ち歩く方が賢明かもしれない。

寛容な人々

シンガポールの人口は約561万人と一見少ないように感じるが、人口密度は2017年時点で8,000人/km²を超え世界第2位となっており、いかに多くの人々がひしめき合っているかが分かる。また人種の多様性から、公用語は英語、中国語



写真1 5月のシンガポール。道路脇に南国らしい大きな木々が植えられており、年中緑の葉をつけている



写真2 「危険！立入禁止！」と英語、中国語、マレー語、そしてタミール語で並記された安全標識



写真3 シンガポール支社の室内勤務スタッフ。他に100名近い現場チームがいる

（マンドリン）、マレー語、タミール語の4カ国語となっており、公共の場でのアナウンスや掲示は複数の言語が用いられている。勿論、工事現場も多言語表示である（写真2）。

労働者以外にも、旅行者が世界各国から集まってくるおかげで、街ではフィリピン語、フランス語、ロシア語等を耳にする（勿論、筆者はどの言語にも精通していない）他、時折懐かしい日本語を聞くことも出来る。筆者が勤務するシンガポール支社でもシンガポール、マレーシア、インドネシア、インド、ミャンマーなど、約10カ国の文化の異なる国の出身者同士が同じオフィスで働いている（写真3）。

多くの人種が共存しているためか、彼らは何に対しても寛容に感じる。まず、言語に関して寛容である。例えば英語が堪能でなくても、身振り手振りを交えながら会話に挑めば、相手が理解しようとしてくれる。筆者の英語がいつまでも上達しないのは、この寛容さの上に胡坐をかいているせいであることは、上司には決して知られてはいけな秘密である。次に、子どもに対して寛容である。例えばちょっと洒落たレストランで子どもが少し騒いだときも、日本では周りのお客さんからじろじろ

見られてしまうが、シンガポールではその程度のことで誰にも気にしない。そして、時間に対して寛容である。ビジネスにおいても会議に遅刻してくることは頻繁にあるし、よほどでなければ怒る人はいない。

「なぜこんなにも寛容なのだろう」と赴任当初は思ったものだが、冷静に考えてみれば、年中暑い国で毎日時間通りに根を詰めて働いていては熱中症になってしまうし、様々な人種が共存する中で言葉が不完全なことを逐一気にしていたらまとまる商談もまとまらない。こうした寛容さは風土に根ざし長い年月をかけて形成されたものだと思つた。

目まぐるしい国

シンガポールといえば、世界屈指のスピードで発展し続けている国である。長年在星している人にとっては落ち着いてきているのかもしれないが、今も街のいたるところで高層マンションの建設が続いていることは、シンガポールの経済成長を象徴していると思う。

公共事業も恐るべきスピードで進んでおり、日本で流れているCMのとおり、特に地下鉄工事は盛んである。2017年時点で199.6kmであつ



写真4 ベジタリアンフード店で頼んだ黒胡椒鳥冬面。味は良かったが汗が噴き出るほど胡椒が効いている

たその総延長は、2030年までに360kmまで延ばすことを目指しているという。東京メトロと都営地下鉄を合わせた総延長が301.3kmであることを踏まえると、その異様さが理解できると思う。

建設工事だけでなくホーカーセンター（屋台群）を取ってみても、5店あれば、そのうち1～2店は定着することなく、次々と変わっていく。筆者がいつも利用しているオフィス近所のホーカーセンターの一角も、当初は醸豆腐（シンガポール風おでん）であったが、カレーそしてベジタリアンフードへと変わってしまった。赴任当時、ほぼ毎日醸豆腐にお世話になっていたため、ヘルシーな醸豆腐がとても恋しい。ベジタリアンフードも味が日本人好みで捨てがたい（写真4）。

多宗教国家

シンガポールには様々な人種が集まっており、同時にそれぞれの宗教が集まっている。仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、分派を考慮すると恐らく数えきれないほどの宗教があり、いたるところに寺院や教会がある。筆者の住んでいるアパートメント近くにもイスラム教のモスクがあり、金曜の夜や彼らのお祭りの期間には、ソンコ（男性が被る帽子）やヒジャブ（女性が顔や髪を隠すためのスカーフ）を身にまとったムスリムの人々が集まり、コーランが流れる。日が暮れる頃、街に流れるコーランに耳を傾けると、異国情緒とはこのことかと実感出来る。

観光名所として有名なチャイナタウンにも、仏教の寺院であるBuddha Tooth Relic Temple（写真5）とヒンドゥー教の寺院であるSri Mariamman Temple（写真6）が近接して建っている。異なる宗教の寺院が近接していても争いが起こらないのは、信仰する宗教をお互いに尊重しているためだと思う。

筆者は特に信仰している宗教は無いが、正月には何となく神社に行って初詣をする人種の一人であるため、シンガポールでも初詣と称してBuddha Tooth Relic Templeを訪れることがある。正面玄関から入ってすぐの壮麗な堂内には金色に輝く巨大な仏像が鎮座しており、大勢の僧侶や参拝客が祈りを捧げている。これを眺めるだけでもなかなか見たえがあるが、ここでは絢爛な所蔵品の数々を間近で見ること出来る（写真7）。

日本では撮影禁止とされていることが多いが、シンガポールでは基本的に撮影は自由である。一見の価値があると思うので、来星の際には旅の思い出に是非一度訪問する



写真5 Buddha Tooth Relic Temple。外側は赤色で装飾され、堂内は金色を基調とした煌びやかな装飾が特徴的



写真6 Sri Mariamman Temple。シヴァやハヌマーンなどの色鮮やかな神々の像が門に飾られているのがシンガポールのヒンドゥー教寺院の特徴



写真7 中央が如意輪観音像。思わず息を呑む美しさで、拝むことで心が浄化される

ことをお勧めしたい。ただし、露出の多い服装では堂内に入ることが出来ないため、その際には入口付近にあるショールや腰巻の無料貸出しを利用する必要がある。モスクやその他の寺院を参拝する際は、服装について制約があるので事前に調べておくのが良いだろう。

短期旅行に適した国

シンガポールでは人口密度が高いばかりでなく、娯楽も狭い国土に集中しているのが特徴である。先に紹介した寺院などの他に、美術館、動物園、遊園地、繁華街などいたるところに観光資源が存在する。例えば、午前中はインフィニティプールで有名なマリーナベイサンズ（写真8）



写真8 マリーナベイサンズ（左）。TeamLabによる体験型の展示が常設されているアートサイエンスミュージアム（中央）。金融関係を中心とするオフィス街（右側）



写真9 定番のティーカップとソーサー以外にも小鉢や砂糖壺等品揃えが豊富なプラナカン陶器。一つ一つ絵柄の表情が違うので手に取って確かめるのがよい

の方へ向かい、マーライオンを見ながら昼食を取り、午後は繁華街に戻って買い物を楽しみ、夕方からナイトサファリに行くというような詰め込んだ予定でも、国土の小ささを考えれば十分可能である。勿論、体力が持つかどうか十二分に検討しなければならない。

今回は長く住んでいる者の目線で、少し変わったプラナカン陶器の観光名所について紹介したい。プラナカン陶器とは、鮮やかな配色と独特の模様が特徴的なプラナカン文化を代表するものである。プラナカン陶器と言えばカトン地区が有名だが、今回紹介するThow Kwang Pottery Jungleでは、他店とは比べものにならない程多くの種類のプラナカン陶器を安価で購入することができる。ここは英国クアアレリ・シモンズによる世界大学ランキング（2019年度版）で12位にランクインする南洋理工大学のすぐ近くに位置している。バスなどの公共交通機関でも辿り着くことは可能だが、旅行や出張の際はバスの経路が分かりにくく時間がかかるので、タクシーで行くことをお勧めしたい。

Thow Kwang Pottery

Jungleに着くとすぐに、多種多様なプラナカン陶器が出迎えてくれる（写真9）。その他の陶器も展示されており、購入することもできる。食器や壺以外にも人型や動物の置物が展示されており、食器に興味がない人も楽しむことが出来る（写真10）。かなり広めの敷地内に陶器類や置物が所狭しと並べられているので、じっくり見るのであれば1～2時間は必要である。また、ワークショップも開催されていて陶器の制作を体験できる。旅行ではスケジュール的に厳しいが、在星の人ならじりじりと暑い中で精神を研ぎ澄ませて陶器の制作に挑戦してみるのも良いかもしれない。

さいごに

シンガポールでは、物価の高さや都会ならではの忙しさなどに慣れないこともあるが、優しい人々、安全で

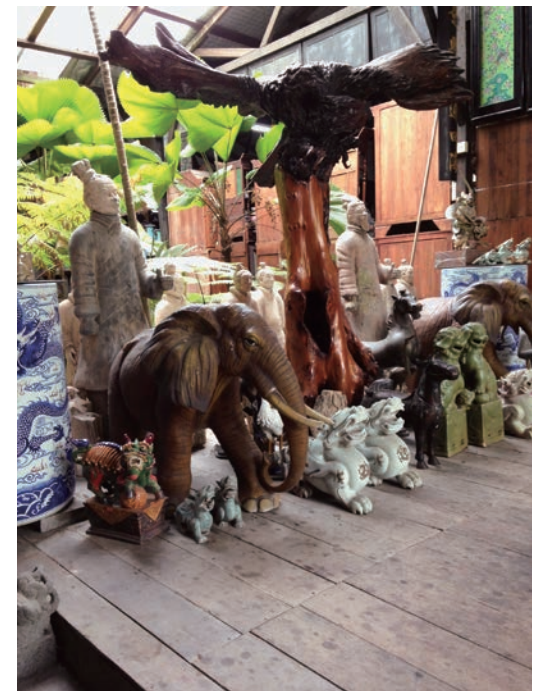


写真10 Thow Kwang Pottery Jungleの大小様々な人型や動物の置物。博物館のように見ていて飽きない

便利な街、食文化の多様性、娯楽の多さなど、旅行者にとって魅力的な国であることは言うまでもない。また労働者にとっても、勢いがあり商機に溢れる国であることは間違いない。西洋と東洋の文化が混じり合うこの国を是非一度訪れてみてはいかがだろうか。